喀爾喀の粉花と宰賽

鴛淵一

一、はしがき

明末清初に於て蒙古諸部が明清二國の間に介在して、其の勢力の消長に重大な關係あつた事は、隱れもない事實であつた。就中成吉思汗の正系を以て誇つた小王子陵丹汗(林丹汗)の察哈爾部と、喀爾喀部との二部は、最も密接な關係があり、或は事態を紛糾せしめ、或は勢力の增强に寄與した。殊に喀爾喀部の中で、內喀爾喀の五部は其の據地が遼西北方より遼東北西部に亙つて居た關係上、明清二國に至大の關係を有したが、其の諸部は舊の泰寧や福餘の諸部の地を蠶食併呑して居たので、清朝側の記錄には札嚕特・巴林・把岳忠の名を記しながら、明側の記錄には喀爾喀と記しながらも、是等を或は泰寧と記し或は福餘と記して、一見所謂兀良哈三衞と混同せしむるやうな記載をなすに至つた。これに就ては夙に和田博士が「內蒙古諸部落の起源」第三篇第三章に於て述べられる所あり、余も亦本誌第二十六卷第四號に「明末に於る喀爾喀と泰寧」なる一文を載せて其の一部に關して述べる所あつた。而して余が前稿に於て述べたのは、主として喀爾喀の中で泰寧と誤り記された所の札嚕特と巴林の二部に關するものであつて、巴林の强酋速把亥と其兄なる札嚕特の烏巴什の二者を中心に、其の世系と卑屬に關して述べ併せてそれ等の活動の一端を述べたのであつた。この速把亥と烏巴什の兄弟は、俱に喀爾喀諸部の

中でも最も強盛で、其の一門の諸酋と共に明清二朝と非常なる關係あり、北邊を騷がして刼掠を恣にした。確に當時に於てこの二者二部の歸趨は明清二國の勢力の消長に大なる影響を與へるものであり、二國共に其の對策を愼重にし十二分の警戒をなさざるを得なかつたのである。然るに從來その點に就て十分明らかにされて居ないので、余はこの間の事情を闡明ならしめんとして、右の一文を敢て世に問ふたのであつた。而して余が右二者の世系を明らかにし、一門の活躍を述るに當つて、主として用ひたものは近年寓目の容易になつた所の、張鵬の遼夷略・瞿九思の萬曆武功錄・管葛山人の山中聞見錄等であつて、何れも明末に於て作られた明人の記錄に外ならない。乃ち是等の記載によつて從來明らかでなかつた所の事柄も明らかになり、明清二國に對する蒙古族、就中喀爾喀諸部の活躍は相當程度迄よく知られるに至つたと思ふ。

併し喀爾喀諸部の活躍を明らかにするのには、前述の諸人の活動のみを以てしては不十分である。といふのは札魯特の烏巴什・巴林の速把亥の外に、同じくこの派の強酋が他にもあり、然もそれがこの二者と兄弟や一門の間柄であるので、これ等に就ても更に考究する所がなければならぬからである。喀爾喀諸酋の世系を說くこと最も詳らかなる遼夷略によると、この烏巴什・速把亥兄弟の親弟にあたるものとして、粉花・歹青(伯要兒)・兀班の三人があり、これ等三人のものや、その子孫のものが又夫々に非常な活躍をなした事が、其他の記錄に照合する時によく知られる。從つて明末の蒙古の情勢をよりよく知るには、當然これ等の人々の事蹟、就中前述の二者の亡き後に部の中心となつて活躍したところの粉花と兀班の孫である宰賽との事蹟を究めることが、特に必要であると思はれるのであつて、此に烏巴什・速把亥二者研究の續篇として、特に粉花と宰賽とに就て以下其の事蹟を述べ、又この二者を中心に喀爾喀の動きを究める事にしたいと考へるのである。

二、粉花とその異名

拙稿に前述する如く、張鼐の遼夷略には速把亥を長子とし、烏巴什にあたる委正を第四子とし、粉花を第二子歹青を第三子、兀班を第五子と記して居るが、委正烏巴什が實は長子で、速把亥が第二子である事既に明らかとなつたから、自ら粉花が第三子、歹青が第四子、兀班が第五子といふ順位になるわけである。但し萬曆武功錄卷十二、東三邊三の炒花(粉花)傳には、「虎喇哈赤季子也」と記し、前後の記事よりすると、速把亥が第二子で次に第三子として同時に末子と思はれるやうに、この炒花を扱つて居る。この季子といふのは確かに誤りであるが、第三子といふ點は動かせぬ所であると思ふ。

さて遼夷略には、速把亥傳の最後に諸子孫の事を記して、「諸夷部約擁騎萬五千。而皆受調度於粉花」と云ひ、次で粉花の傳には「至今粉花諸種爲强」とか、其子孫を記して「九子之派又分爲二十六强矣」とか、「今粉花尙在。而計其部落兵。蓋萬五千騎焉」とか記し、以て其强盛の狀態を述べて居る。尙又粉花の强盛は右の傳の續きに、委正卽ち烏巴什の札魯特部も「市賞仍入開原新安關者。粉花第四男委正諸子也」といはれ、弟兀班の部も「仍入新安關市賞者。粉花第五男兀班諸子也」とある事によつても分るのである。何となれば、烏巴什・兀班共に粉花の兄弟であるのに、粉花の子の如く誤り傳へて居ると思はれるからである。故に明史卷二三八廝賚傳には、萬曆三十八年の條に、

泰寧炒花素桀驁。九子各將兵。他部宰賽・煖兎又助之。遂將長戰。但以增歲賞爲事。寇益無所忌。

と記して同じく炒花卽ち粉花の强雄を直書して居り、かの三朝遼事實錄の如きは、卷七、天啓二年(天命七年)正月の條に、遼撫王化貞の揭報として、

粉花聞之。亦率五大營。來言助兵。……粉花五大營領銀一萬。……

といひ、以て淸太祖奴兒哈赤牽制の爲に賞銀を以て懷柔せん事を要請せる旨を述べて居る。此に所謂五大營とは前にも一言した所の五鄂托克の事で、喀爾喀五部を指すものと見得るのであるから、粉花がこの頃には全く喀爾喀の總帥たる實勢力を有し居り、蒙古部內に於て察哈爾

の陵丹汗に優に拮抗して居た事は言ふ迄もない。

かくの如く速把亥の直弟たる粉花は、萬曆末期より天啓時代にかけて大勢力を有して居た人であるにかゝはらず、この名が清朝の所傳に全く見えて居ないのは甚だ異とするに値するであらう。何となれば、第一に彼が喀爾喀の總帥的地位にある實情に照して、第二には天啓元年二年卽ち天命六年・七年頃には生存して居ると思はれるから、當時既に喀爾喀と深い交渉を有した清朝側の所記には、當然粉花の名が現はれるべきであるのに、其の名は勿論、通音の異字のものすら見えないのは、正に不思議といはねばならない。而して事實彼との關係があつた以上、其人物が清朝側に於て知られたに違ひないと思はれる限り、粉花は恐らく別名を以て清朝側所傳に記されて居ると考へるのが、妥當でないかと思はれる。よつて次には明清二朝の記錄に就き、其內容を對比して、以て粉花の別名と思はれるものを考察してみたい。

先づ清太祖實錄(今便宜上滿洲實錄を引用する)をみるに、天命四年十月二十二日の條に

是日。喀爾喀部卓禮克圖洪巴圖魯合五部貝勒等。致書曰。……

と記して、明に對する攻守同盟を提議したるを言ひ、次で同年十一月初一日、滿洲側より五人の使者がかの地に赴いて誓をなした時に、約を守らず通告せざる者は天罰を蒙るべきを言つて、貝勒の名をあげた所に、喀爾喀部執政貝勒都稜洪巴圖魯を筆頭として記してあるが、右の卓禮克圖洪巴圖魯と都稜洪巴圖魯とは必らずや同一人であつて、當時の喀爾喀の統帥的實力保持者に外ならぬと考へるのである。又この名は天命十年八月、清朝の同盟國たる科爾沁の奧巴台吉が察哈爾の陵丹汗に迫られて急を太祖に訴へた書中に、其際に於る喀爾喀五部の態度を說いて、次の如く言つて居る中の洪巴圖魯貝勒と同一であらうか。

五部貝勒中。吾不能盡知。獨洪巴圖魯急刈其禾。欲與我合。吾所恃者。洪巴圖魯・巴林二人而已。……

これ等の名字は、滿洲實錄滿文によれば、

卓禮克圖洪巴圖魯=Joriktu hūng baturu

都稜洪巴圖魯＝Dureng hūng baturu

洪巴圖魯貝勒＝Hūng baturu beile

とあてられて居る。右の二事件に關しては、かの滿文老檔にも記事があり、前の件は卷十三の天命四年十月二十二日の條に「Kalka の Joriktu hūng baturu beile 首となりて衆貝勒より遣したる書……」、同十一月初日の條に會盟の事を記した中に、Kalka の執政 Dureng hūng baturu 以下の貝勒名を記し、後の事件に關しては卷六十五の天命十年八月九日の條に、同じく科爾沁の Ooba Taiji の書言を記して、「Hūng baturu 首となりて Jargūchi を使として遣はし、察哈爾の兵は新月（九月）の十五日に汝等の處に向て出發すと云へり」「……Hūng baturu は田を急ぎ收めて我等に會せんとす、Hūng baturu, Barin この二者を我等は信賴せり……」と言つて居る。こゝには或は Joriktu 或は Dureng と冠稱して居る所あるが、その記載の法よりして同一人と見るべく、單に Hūng baturu beile とあるものに相當るものと思はれる。之に就いては和田博士も夙に述べられた所で、何等

間違あるまいと思ふ。（內蒙古諸部落の起源三五九—三六〇）又この Hūng baturu beile は、三朝遼事實錄天啓六年（天命十一年）四月の條、撫夷副將王牧民が巴林部昂奴貝勒の太祖に討滅されしを報告せる結末の句に、

今黃把都兒會同把領・宰裘・煖兎・卜兒亥五大營。在舍莫林一處住。差人會虎墩兎愨助兵報仇。不知肯否。

とある中の黃把都兒ともあたるものであらう。嚴密に言へば hūng（洪・烘）と黃の huang は支那音の上では異るべきであるが、これが常に通音として用ひられたことは疑なく、況してや五大營（之に就ては前揭書第三章第四節參照のこと）の頭たる地位にある記事內容よりしても、十分に首肯出來る所であらう。而して右の煖兎は察哈爾の一族であつて常に喀爾喀と行を俱にせるもの、卜兒亥は喀爾喀五部の一である Bayut 部の恩格德爾台吉の父たる達爾漢巴圖魯なる如く、巴林とは粍花がその部の代表者たる地位にある今日に於ては、速把亥の子か孫の何人かを指すものであらうといふ擬定は、これ亦和田博士が既にされた所で（前揭書三五—三六二）、誤りないと思ふ。

然る時、これ等有力な强酋四人に黄把都兒を加へて五大營といつたとみれば、この黄把都兒が前の洪巴圖魯である事は愈々疑ない事となる。而してこの名が前記の諸例に見られる如く、常に喀爾喀諸部の筆頭に在る所からすれば、必らずやこの人が全喀爾喀の統率者であり、最大の實力者であつたと見るべきである。要するに、卓禮克圖洪巴圖魯・都稜洪巴圖魯・洪巴圖魯と清朝側の記錄に在るものは、三朝遼事實錄に黄把都兒とあるのと同一人で、喀爾喀の代表者の地位に在つたものである事は疑ない。而して同じ三朝遼事實錄卷二、萬曆四十八年（天命五年）正月の條に、清太祖と喀爾喀とが會盟した事を傳聞して、

奴酋多遣奸細潛伺內境。市夷數報。伯要兒・紗花等與奴歃血約。虜從三岔河迤東截漕船。

と言つて居る。右の伯要兒は同じく速把亥の弟なる伯要兒歹青と見るべく、或は別人とするも、これによると紗花がその會盟＝即ち天命四年十一月に行はれたる會盟＝に與つた主要なる人物であつた事が、明人にも分つて居たのであるから、之を清朝側の記錄に於て會盟の主役者の地位に記して居る洪巴圖魯にあたる事は、いよ〳〵疑ない事になつて來る。かくして清朝側の記錄に紗花の名は別名を以て記されて居る事が明らかになつたと思ふ。

三、紗花の行動

蓋し當時天命年間に於て、喀爾喀は明清二朝の間に介在して雙方より牽制誘引せられて苦しい立場に在つたやうであるが、それ自身としては烏巴什・速把亥の後を承けて勢力强く、和戰を事として利を圖つて居た。故に紗花も天命四年十一月に於て清朝と會盟したのであるが、之は全く同年七月鐵嶺郊外に於て、太祖が喀爾喀の强酋の一人である宰賽を俘へた爲に、太祖の勢力の侮るべからざるを見て、俄かにかゝる和親の態度に出たものであつて、固より眞意の程は測るべきでない。或はこの時既に紗花は漸く老齡、衰勢を示したものと考へられ、明人がこの時の情勢に連關して、

奴酋連破開鐵。兵益强。生擒宰賽。鈐制煖兎・炒花數

十營。不敢動。（山中聞見錄卷二、萬曆四十七年九月の條）

と述べて居るのは、或は眞を傳へたものであらうか。但し宰賽が傳へられたからとて、紗花が急に弱くなつたといふ事はあり得ないのであり、寧ろ太祖の勢力の餘に强盛となつたのに愕き、四圍の狀況を判じて俄かにかゝる態度に出たものとも考へられる。故に洪巴圖魯紗花は喀爾喀諸部の筆頭貝勒として、天命四年十月に書を太祖に送り、次で十一月初日約を太祖と結んだのであつて、翌年に其の喀爾喀の酋にして會盟にも加はらずして清朝の使を劫掠したものも出でたが、紗花のみ飽く迄も盟約に忠實ならんとした事は、清太祖實錄の天命五年六月の條の記事によつて知られる。今滿洲實錄の記事を引用するに、

滿洲使者扈曼、往札嚕特達雅台吉處。齎來馬八匹牛四十四羊一百。並所騎之馬衣服器械等物。被本部鍾嫩・昂阿・珠徹特扣肯等、棄盟言使兵要於路。俱劫之。惟放扈曼而已。

滿洲往五部使者還曰。五部貝勒等已負盟矣。謁鄂巴岱青二次不容相見。諸部之使不來。惟二部使者至。述都稜巴圖魯之言曰。吾子孫之心俱變而不能制。然吾身絕不負汗也。

とある。第一項の鍾嫩・昂阿・珠徹特扣肯等は、何れも札魯特の諸酋であつて、天命四年十一月の會盟に加つて居ない人々であり、これ等が清朝に反抗の態度に出るのは當然の事といへば當然である。故に滿洲の使者が、これ等の人の非行を指して「五部貝勒等已負盟矣」といつたものとすれば、それは言ひすぎであると思はれるが、或は加盟の貝勒等の中にもこれと同樣の態度に出たものがあつたと見られぬ事もない。その事は太祖實錄では明らかでないが、滿文老檔の記載は多少この間の事情を示して居るやうである。乃ち滿文老檔太祖紀第十五卷、天命五年六月の條をみるに、四日の事として Jarut の Jongnon, Angga, Jocit Keoken 三貝勒の掠奪の事を記し、次で八日の事として、喀爾喀に赴いた使者の復命を記して喀爾喀の諸貝勒は皆盟に背きて、我等二回 Ooba-daici-ng に會はんとしたれども會はしめず、衆貝勒の使も來

らず、唯二貝勒の使來れり。Dureng baturu baile 曰く、兩家二家となりて生きん、同心して支那の國を伐たん。若し支那と和せば同心して和せん。百世萬年に至る迄好く生きんと。天に白馬、地に牛を殺して、血を撒き誓ひて一月一年にならざるに、汝等の Baga darhan beile 天地に誓ひたる言に背き、支那の唆せる言を容れて、Jaisai の俘へられたるを思はず、その命を恐れず、自ら持せる道に背き惡をなし行くを、汝等の五部の諸貝勒は何と見るや」と書きて、Eksingge, Hife といふ二大臣を遣せり。……

と言ひ、それに續けて兩者の交渉言ひ分を述べて居るが、その中に

「且つ Dnreng hung baturu beile は、汝等の五部の大小諸貝勒衆台吉等、皆吾を難ず、吾が子孫等の心皆變ぜり。我言ふとも勝たず、我自身は汗に對して惡しく思はず、と言ひたりき……。」

とある。この句が先の實錄の記事中に見える句に相當するのであるが、滿文老檔の記事によると、前記の三人の貝勒だけでなく、先の會盟に加はつた Neichi han(內齊汗) Uijeng beile (魏徵貝勒) 等の非行もあつたやうであるから、實錄に「五部貝勒等已負盟矣」と言つて居るのは或點迄事實であつた事が分ると思ふ。故に一時滿洲と盟を誓ひ和交を約したが、それに背いて勝手なる振舞に出たものがあつたのは、疑ない事實といつてよく、從つて長老たる粹花はこれを指して詑びると共に、自身のみは約に忠なる所以を强調したものと解せられるのである。但しかく言ふものゝ、洪巴圖魯粹花自身も陽制陰助して諸酋の反淸行動を煽動した事は、疑ない所であつて、滿洲實錄卷七、天命六年三月二十日、太祖率兵克遼陽の項に、十九日の事として、

蒙古國喀爾喀部卓禮克圖・達爾漢巴圖魯・巴哈達爾漢・實爾呼納克等四貝勒部下二千餘騎。聞大兵已拔瀋陽。乘殘破之餘。來竊取瀋陽財粟。時有滿洲之游牧蒙古在城中。遂出城驅殺獲牛馬甚多。生擒三十人以獻。帝命斬其二十四。留六人持書歸責其侵擾之故。

と記して居り、(滿文も同樣の記載)滿文老檔にては、太

祖紀十九卷の同日の條に、

Kalka の Joriktu beile の部衆 Darhan baturu の部衆 Baga-darhan の部衆 Barin の Sirhunak の部衆 Sinnyan（瀋陽）城を取りたるを聞きて、財穀諸器を取らんと二三千人、馬駱駝牛車を以て來りたり。八旗の游牧蒙古人を、「瀋陽城に穀物を集めよ」と留めたりき。その來りたる Kalka の蒙古人を逐ひて、三百牛二十馬四駱駝を取りたり、三十人を捕へて、六人に書を持たせて放ちてやりたり。其の他を……我が取りたる所を汝何故に侵すやとて、悉く殺したり。

と言つて居る所によつて明らかであるやうに、Kalka の Joriktu beile といふのは、卓禮克圖洪巴圖魯卽ち粉花であつて、よしんば彼は清朝との盟約に忠實ならんとしても、其の部衆を十分拘制し得なかつた所に、やはり反清的行爲を示したものといふべきである。又粉花が反清的行爲をなし、或は其の意思のあつた事は、明人も明察して居た事が明實錄によつても伺はれる。乃ち一、二の例をあげるに、明實錄天啓元年（天命六年）五月癸亥の條に、兵部發銀於廣寧。前後扣留及解發。共一百萬兩。爲撫賞粉巴（花？）之費。從巡撫王化貞請也。

とあり、同年六月己亥の條に、

時宰賽尙繫奴酋所。奴遣宰賽傳語其妻以馬萬匹牛千頭來贖。宰賽妻謀之炒花。炒花以爲詐勿許。宰賽使者語炒花。今奴酋已治軍張義站。將圖廣寧。炒花遣人來告遼東巡撫王化貞。

といひ、更に同年七月庚子朔の條に、

巡撫遼東王化貞題。奴賊謀犯廣寧。已於張義站會兵。粉花雖與我合。然怯奴積威。……

と記して、以下粉花懷柔の策を屢々述べて居ることは、粉花が天命四年の會盟後に於て、又天命五年の辯明の後に於ても、決して清太祖に對して心から信服して居るのでない事、及びそれに乘じて明臣が策動懷柔して、彼を明側に抱き込まうとしたものである事を、よく示して居る。又已に和田博士が引用されたやうに、（内蒙古諸部落の起源三四二頁）三朝遼事實錄卷之七、天啓二年（天命七年）正月の條、遼撫王化貞の言に、粉花が陵丹汗に劣らざる賞銀を强要し

たこと、新に四千餘兩の增賞を强取した事を述べて居るのは、籾花の强盛の然らしむる所ではあるが、明が彼を懷柔せんとしたことに乘じた籾花の奸策であると共に、又彼が反清的意圖を十分に有して居たことを示すに足ると言はねばならぬ。故に山中聞見錄卷二、天啓元年十月の條には、「王化貞撫炒花五營・虎墩兎愨八營・小歹青等。咸受約定盟共擊敵。饋炒花銀三萬餘兩。炒花留瘊騎爲我哨探。」といふ記事が見られるに至つたのである。蓋し籾花が甚だ詐咯に富んで居たことは、明人も夙に知る所であつて、全邊略記卷十、天啓元年四月の條に、「五營之衆。伯要子之悍。煖兎・巴陵之獄。籾花之詐。」とある事によつても知られるから、彼が明と清との間に在つて、巧に操つて自利を圖つた事は當然のことである。從つて前述した所の如く、清朝に對して盟約しながらも、一面に於て部下を密かに煽動して反清の態度に出でしめ、然も自分のみは汗に負く所なしと言ふ口から、明に强要して賞を貪つた如きは、茶飯事であつたといつてよからう。この事は賢明な清太祖の察知した所であつたと思はれ、遂に天命八年四月に至り、征蒙の師を出したのも、たしかに籾花膺懲の意が一面に於て存したことゝ解せられる。

四、籾花の晩年と其の子孫

以上述べる如く、籾花は特異の人物として喀爾喀に於て重きをなし、又實際に强盛を保持して居つた。故に明清二國の間に介在して種々の態度に出たのであるが、彼としても清太祖の發展强盛を十分に知つて居たから、一には表面上盟約して居たのであり、この態度を變へまいと努めたやうであつた。乃ち天命十年八月科爾沁の奥巴の報告に見ゆる如く、彼は科爾沁を助けて清との同盟に忠實ならんとし、九月陵丹汗が科爾沁を征伐せんと決意して居る旨を密告した位であつた。然しながら翌天命十一年正月、太祖が寧遠に於て傷をうけるや、籾花は好機到來として、爾々その意を覆へして明に附し、清朝の斥候を殺して明の重賞をうけ、反清の態度を明らかにした事は、三朝遼事實錄によつても知られる。卽ち同書卷十六、天啓六年四月の條に、寧遠副將左輔報として、

本月十七日。東奴過河要犯寧遠等處。炒花說。奴酋如果西犯。我們發兵去助天朝。帶領衆夷。行至養善木。

とあるのがそれであつて、其當時の心境を最もよく示して居る。併しこの時炒花は太祖の兵の爲に大敗を被り、彼が倉皇として遁走した事は、右の文に續いた記載がよく語つて居る。乃ち、

撞遇奴酋。將炒花・襲路台吉殺死。有歹安兒相離襲路半日之地。奴酋哨馬深至歹安兒營。被歹安兒精兵殺死奴部五十餘名。捉獲活夷二名馬五十匹。奴問是誰家兵馬敢與我厮殺。復帶精兵返到黃河沿至。二十五日早將歹安兒兵馬圍住。有歹安兒幷妻跑出。其餘部落盡被殺擄。炒花亦跑過黃河北躲避。……

といふ記事は、初め如何に意氣揚々として出陣した炒花等の軍勢が、一擧に覆滅遁走するの已むなきに至つた狀態を知らしめるに十分である。尙同樣の記事は山中聞見錄卷四、天啓六年の條にも見えて居る。

初敵寇寧遠。炒花以兵助我師。四月己丑七十建人發兵襲擊炒花。遇炒花於養善木。殺其姪襲路台吉。復圍昂奴寨。殺昂奴擄其妻子。分兵掠。炒花子歹安兒與戰。殺敵五十人擒二人。奪馬五十騎。丁酉二十五建人益兵來攻圍之。歹安兒與妻俱走。部衆盡被殺。炒花渡黃河北以避之。其部衆避難未歸者二千。督師之臣安插之關外。虎兎諸部會兵欲執仇。

乃ち一時は滿洲軍に對して小捷を得たが、結局炒花の姪の襲路台吉や昂奴等は殺され、炒花父子が遁走するに至つて、蒙古軍は大敗を被つたわけである。これは明人の記錄であるから、實情をそのまゝ記したと思はれ、何等割引する點はないと思ふ。然らばそれに相當する清朝側の記錄如何といふに、太祖實錄天命十一年の條に堂々と次の如く記してある。

初帝與五部貝勒等盟。曾言。若征明與之同征・和則與之同和。後五部貝勒等背盟。私與明和。殺滿洲斥堠軍獻首於明國。多受其賞。又屢劫滿洲使者財物牲畜。由是與之爲惡。於四月初四日。率諸王大臣統大軍征之。……初六日大兵星夜前驅。次日天明。分兵八路並進。前錄四王二王阿濟格台吉碩託台吉。先至襲努克寨襲努克乃

喀爾喀巴林部落。葉赫巴圖魯幼子。　褒努克領從者數人棄寨而走。滿洲諸王隨後追之。褒努克且戰且走。忽背後一王突至。褒努克未及避。被射死於馬下。射之者乃四王也。後大兵續至。取環近屯寨收其牲畜。（滿洲實錄による）

右の文では明側の記錄に見える所の、炒花・歹安兒及び昻奴等の名は見えぬが、右に續いて初九日に太祖は大王二王四王等をして精兵一萬を以て追はしめ、三王が進んで實喇木倫に到り牲畜多數を得た事を記して居るのが、炒花等の遁走と追跡とを語つて居るにちがひない。とにかく以上によつて、炒花が清太祖との約に背いて明を助けて兵を出し、然も一敗地に塗れて遁走した事は十分に知られるのである。

因に粆花卽ち炒花に歹安兒といふ子のあつた事は、張彌の遼夷略、粆花の項によつて疑なく、是には粆花の生子九人を記し、其の五子として歹安兒の名を擧げ、又この歹安兒に三子あつた事が見えて居る。故にこの父子が黃河（卽ちシラムレン）の北方に遁れた事は、當然の事として差支ないが、疑問は褒努克と昻奴にある。乃ち山中聞見錄によると、明らかに褒路台吉と昻奴と別個の人のやうに思はれるが、前引三朝遼事實錄の寧遠副將左輔報では、粆花・褒路台吉・歹安兒の三人の名をあげて居り、前文には引かなかつたが、虎墩兎憨卽ち陵丹汗が粆花を責めた語の中にその褒路台吉を粆花の姪子と言つて居る記事がある。然るに同じ三朝遼事實錄の同月の條別項には、「撫夷副將王牧民據中軍張仲傳報。奴酋攻殺昻奴。昻奴離邊止有二百里。于四月十七八日猛有奴兵圍住。……」と記して、全く褒路の名を示して居ない。而して一方の清朝側では、褒努克のみを記して然も巴林部落葉赫巴圖魯の幼子と注記して居る。これ等は何れも同じ交戰の事を述べたものであるから、互に合はねばならないが、一見合はぬやうに見えるのは何故であらうか。それは傳聞する者が夫々の方面から得た事を、そのまゝに報告したと解すればそれ迄であるが、それにしても結局問題は、褒努克＝褒路と昻奴とが同一人か別人かといふ點に在るのでないかと思ふ。ところで褒努克は巴林の葉赫巴圖魯の幼子とあるが、この葉赫巴圖魯は嘗て述べたや

うに、巴林の强酋速把亥の三子把兎兒であるとすれば、其の末子は明の記錄たる遼夷略による限り、昂奴に外ならぬから、襲努克と昂奴とは末子と幼子といふ點に於て、同人異名と見るのが妥當であらう。從つて若し同人であるとすれば、山中聞見錄にこの二者を別々にして、俱に清軍に殺されたと言つて居るのは誤りであることになる。又一方同人でなくて別人とすれば、遼夷略は襲努克の名を脫落したものといふべきであるが、可成り蒙古諸酋の世系を記すこと詳しい遼夷略が誤つたとは考へられず、寧ろ山中聞見錄は同じ明の記錄でありながら、誤記したものとみるべきであるまいかと考へられる。但然る時、襲努克を粉花の姪とすることは、粉花が速把亥の弟である以上、實を得たことではなく、眞實の姪なる把兎兒の子であるのを、便宜上姪と呼んだものと解さねばならぬと思ふ。而して把兎兒は葉赫巴圖魯（卽ち大バートル＝大なる英雄、大勇の義）といはれる位に强盛であり、速把亥の死後大活躍をなした人であるから、其の子の襲努克卽ち昂奴も亦餘勢を以て强盛であり、常に清朝に反抗の態度に出た爲に却つて部衆の逃去するもの多かつた事は、滿文老檔の記載に於て明らかに見られる所である。要するに、清朝側の襲努克は三朝遼事實錄の寧遠副將左輔報及び山中聞見錄の襲路台吉であり、それは同時に同じく撫夷副將王牧民據中軍張仲傳報と山中聞見錄の昂奴にあたるもので山中聞見錄は誤つて別人に記したとみて差支なく、語頭のNが落ち語尾のKが響かなかつた爲に起つた結果昂奴と寫されたのを、文字の異なる所から別人の如く解するものあるに至つたと解して差支ないと思ふのである。（拙稿「明末に於ける喀爾喀と泰寧」本誌二十六ノ四、七六—八一頁參照）

以上述る如く、天命十一年四月に清軍と蒙古の粉花の軍とは衝突をなし、その結果後者は大敗北を喫し、遂に粉花父子は北走するに至つて、此に粉花の勢力は俄然弱まつたのであるが、先に清太祖と盟約し、又其の後自分のみは盟に背かぬと言明した粉花として、その行爲は眞實の心からの事でなく、實は叛服常ないのであつて、これが蒙古族の實力者として僞らざる心情であると言ふべきものと考へる。然もこの人が如何に强盛であつたかは

既に和田博士が述べる所であり（内蒙古諸部落の起源三四二頁）、又前述した如く遼夷略の記載によつても明らかな所であつて、九子二十六派に分れ、兵は一萬五千騎に及んだといはれ、一族諸派が其節制をうけたといふ事によつて、十分に知り得ると思ふ。遼夷略の九子とは、襖八歹青・把敗・額眞・刺八時氣・歹安兒・端木度・卜塔什利・木卜太・襲奴（この襲奴は前述の襲努克とは異る）をいひ、天命四年十一月の會盟の條に、洪巴圖魯の次に、鄂巴岱青(Ooba daiching)額森(Esen)巴拜(Babai)とあるは、右の中の襖八歹青・額眞・把敗にあたり、天命五年六月八日の條に、滿洲の使者が會見するを得なかつたといふ鄂巴岱青も右の襖八歹青であり、滿文老檔天命六年三月十一日の條の「蒙古 Joriktu beile の子 Babai taiji ...」、同七年三月十一日の條の「Babai taiji と Darhan taiji の名を與へたり」といふ Babai taiji は卽ち右の把敗にあたり、又同六年十二月十七日の條の「蒙古 Joriktu beile の子 Hubilhan taiji ...」の Hubilhan は右の九子の中に當るものないが、同八年正月十四日の條「蒙古 Kalka の Labasihib taiji 來降……」とあるのは、或は右の刺八時氣にあたるものであらうか。これ等の人も決して弱勢ではなかつたと思はれるが、餘りに父粉花の名聲が高つた爲に、それに壓せられて記錄に見える所少いことは想像するに難くなく、恐らく父に似て清朝と會盟しながら、同じく反抗の態度を陰に存して居たのであらうと解せられる。

五、宰賽の世系

宰賽が同じく喀爾喀の强酋で、萬曆年間より明を侵して罪を獲た事あり、遂には天命四年七月に至つて清軍に囚へられ、數奇を極めた生活を送つた事は周知の所である。然らば其の世系は如何といふに、之に關して先に和田博士は「內蒙古諸部落の起源」三二一頁以下に於て述べられる所あつたが、今よりすれば可成り誤りと思はれる點があるので、先づ茲に其の說を摘記して檢討を加へる事にしたい。

『明史卷二二八李化龍傳によると、宰賽を以て福餘の伯

言兒(兎?)の子となし、同卷二三九董一元傳には、萬曆二十二年冬十月伯言兒は泰寧の把兎兒・炒花及び卜言台周等と呼應して、遼西鎭武堡に入り敗北戰死した事が見えて居る。其記事よりすれば、伯言兒・宰賽父子の住地は、開原慶雲堡邊外の地で正しく故の福餘の地であるが、宰賽が喀爾喀の人である事は疑ないから、伯言兒が果して福餘衞の夷人であるかは疑はしい。この疑を懷いて明人の記錄を見るに、明朝紀事本末卷二〇の設立三衞・萬曆二十二年十二月の條には、伯言兒の敗死を語つて之を伯言に作つて居るが、同書萬曆十一年五月の條にはその伯言を泰寧衞速把亥の子として居る。全邊略記卷十遼東略萬曆十年の條にも、泰寧の酋速把亥の子に伯言ありと傳へて居る。均しく福餘の伯言兒が同時に泰寧の伯言と呼ばれるのは、最も怪しまれる所である。而も全邊略記卷十及び明史卷二三八李成梁傳の萬曆十年速把亥陣歿の記事によると、福餘の伯言兒は泰寧の伯言のみならず、實に有名なる强酋速把亥の子卜言兎なる事を知る。然るに卜言兎の名は明史李成梁傳には、萬曆九年と十年と二度現はれた後見えない。其後速把亥の遺子として聞えた者は次子把兎兒のみであるが、李化龍傳・董一元傳では、萬曆二十一二年になつて俄然伯言兒といふ酋長が出て來る。然る時把兎兒が速把亥の次子であり、明朝紀事本末には把都として「泰寧衞伯言・把都」と記すから、伯言兒は速把亥の長子であらうと思はれる。思ふに卜言兎が故なく消失し、伯言兒が突然現れるのは怪しい事であるが、紀事本末・全邊略記の仲介によつて同一人と爲す事が出來れば、凡ての疑問は氷解するであらう。紀事本末では伯言は必らずしも萬曆十年以後一時姿を隱さなかつたやうであるが、明史の一時之を注意の外に逸出したのは、恐らく彼が其後東北方福餘の故地に移つた爲で、故に其の再び出現するや、福餘の伯言兒と假稱されたものであらう。然る時この人は福餘の人でなく全く泰寧速把亥の子といはねばならぬ』と述べ、轉じて速把亥の發展、福餘・泰寧の消失を說き、次に喀爾喀の全盛を說いて居られる。而して萬曆十年に速把亥は死んだが、次子把兎兒は叔父粉花等と共に泰寧の故地を有し、長子

ト言兎は北方福餘の地に據つて察哈爾の一族と共に勢を得たる事、二十二年布延汗と共に鎮武堡に入つて卜言兎は斃れ、把兎兒も傷いて後死し、此に一時喀爾喀は弱つたがやがて炒花が盛んになつた事に說き及んである。

右の說は一應當然の推定判斷と考へられるが、先年來手にするを得るに至つた明側の記錄史料によれば、必らずしもかくの如く考へなくとも差支ない事、否考ふべきでない事が明らかになつたのである。先づ萬曆武功錄東三邊三、速把亥傳によると、速把亥は萬曆十一年鎭夷堡に死んだ事(及び其の長子に卜言兎(別名伯彥務)、次子に卜言把都兒のあつた事が知られる。次に同じく卜言兎・卜言把都兒傳によると、卜言兎の事蹟は萬曆十三年迄しか見えずして、次に弟の卜言把都兒の事が直ぐ記されて居る。然る時卜言兎はこの十三年頃に歿したものと見るのが妥當でないか、卽ち和田博士が述べられたやうに、李成梁傳に九年十年と二度見え、其後二十二年になつて再び現れたといふのは、同一人でなく別人と見てよいのでないかと思はれる。若し同一人が現はれたとすれば、明人でも全く知らぬ筈はなく、かかる列傳にもその事を記すに相違ないと考へるのである。故に卜言把都兒傳に、萬曆十六年と二十二年の條に卜言顧とあり、同じく二十二年に、「酋首伯言兒中流矢死」とあるのは、先の卜言兒とは別人と見るべきである。又同じ武功錄東三邊三、炒花傳の萬曆十二年と二十二年とに見えるト言顧が卜言把都兒傳の卜言顧である事は言ふ迄もない。とにかくこの武功錄の記事によると、速把亥の長子である卜言兎は萬曆十三年迄しか事蹟の記されるものないから、恐らくこの前後に歿した事、其後に見えるト言顧とか伯言兒は相似た名、同音異字であつても、前者とは別人と見るべき事が考へられると思ふ。而してこの事を更に確固たらしめるのは、遼夷略の記載である。卽ち遼夷略に速把亥の系譜を記して、

速把亥有三子。長卜言兎無子。次卜言顧有三子。其三男把兎兒有七子焉。二枝分爲十派也。卜言兎一名伯彥務。胡人名多訛音也。卜言兎傷。父死與其弟把兎兒枕戈飲血而思蹂塞上以相當。後塞上禦之歲苦矣。而把兎

兒以鎭武堡箭傷竟死。其死之者董將軍一元也。……

といつて居る。これによると速把亥に三子あり、長子の卜言兎は父速把亥の死んだ時(卽ち萬曆十一年)に、弟の把兎兒(卽ち把都兒・卜言把都兒)と邊患をなす事を誓ひ、其後活躍したらしいが、「塞上禦之歲苦矣」は必らずしも長い間の事でなくて、武功錄に其名の見える如く萬曆十三年頃迄とみてよいのであり、恐らくこの頃歿して以後はその二弟卜言顧と把兎兒が專ら活躍したと考ふべきであらう。故に明史李成梁傳に九年と十年と二度其名が見えて以後見えないといふ卜言兎は必らずやこの卜言兎で、十三年頃に死歿したものと推定されるのである。然る時明史李化龍傳・董一元傳に二十一二年になつて見える伯言兒とは何人であるかが次の問題となる。若しこれが速把亥の系統の者であれば、右の次子卜言顧が字音の上に於て最も近いが、それよりは、前述の武功錄卜言把都兒傳二十二年の條に「酋首伯言兒中流矢死」とある伯言兒であり、これを他に求めるのが妥當の事と思はれるのである。その際恰好のものとして擧げ得るのは、同じく遼夷略の兀班に關して記されて居る記事に外ならない。遼夷略によると、

泰寧衞之夷酋曰虎喇哈赤。故矣。而生五子。曰速把亥。曰秣花。曰歹青卽伯要兒。曰委正。曰兀班。

と記し、別に兀班に關して

兀班故。而生二子。曰莽兎。曰伯言兒。……伯言兒以入犯高平被傷死。而其子宰賽。生三子。于萬曆己未秋七月。爲奴酋所獲。……

とある。萬曆二十二年所謂泰寧諸部酋の侵冠は專ら廣寧に向つてなされたもので、この時に將董一元がその正面に當つて防戰し、兵を鎭武堡に匿して敵を深く誘ひ、俄かに出でて之を討つて大勝を得た事は、武功錄の卜言把都兒傳によつてもよく知られ、又同樣の記事は全遼略記卷十遼東略同年の條にも見えて居る。この鎭武堡は廣寧の東南に在る城堡であり、高平は其北方にあたり盤山の東に位する事は、明代の地志によつて明らかであるから、前記遼夷略の伯言兒が高平を犯して傷いて死んだといふのは、萬曆武功錄卜言把都兒傳の右戰ひの記事に、

「是時酋首伯言兒中流矢死」。とあるのと正しく相當るものであり、それが同時に紀事本末二十二年十二月（十月？）の條に伯言兒が鎭武堡に敗死したといふのと同じものを指す事は疑ない明な事と言はねばならない。伯言兒は必らずや伯言兎であり、已に酋首として居る以上これを明史李化龍や董一元の傳に、萬曆二十一・二年の頃俄然見える所の强酋伯言兒に擬定しても、決して何等の不自然さもないと思ふ。卽ち明史の傳に萬曆二十一・二年になつて見える强酋伯言兒は、決して速把亥の長子なる卜言兎でなくて、實に速把亥の親弟兀班の次子なる伯言兒その人に外ならないのである。從つて遼夷略によれば天命四年淸軍に囚へられた强酋宰賽こそ、この兀班の子なる伯言兒の子であり、決して速把亥の子孫にあたるものでない事は明らかであり、前後諸事極めて明瞭になると言はねばならない。而して遼夷略の福餘衞の記事によると、

福餘衞之夷今弱矣。當萬曆丁亥（五年）〇十戊子（六年）〇十間。勾西虜爲開鐵患。亦中國一疥癬也。乃竟爲西虜所殘弱而避居混同江。江離開原邊千余里。其久不赴新安關領市賞。積弱不振之故也。……夫恍惚太・土門二皆蕞日引煖兎・伯言兒爲邊患者。然總其部纔五千。非附會西虜。烏能狼突而訌塞上哉。

とあり、福餘衞と伯言兒との關係をよく知る事が出來る。故にこの伯言兒を明人が誤つて福餘の人と記すのも所以なきに非ざる次第で、從つて明史李化龍傳には宰賽を福餘伯言兒の子と記すに言つたわけである。されば和田博士が明實錄の記事を引いて、伯言兒・宰賽等の部落の位置を推定し「常に北關葉赫に連りて開原慶雲堡に薄れる彼等は、寧ろ法庫・康平地方に在りきと言はんより、更に東方遼河を越えたる八面城鄭家屯附近に至りしが如し。是に至つて福餘衞の殘域遂に存するに所なし云々」と述べられたる（內蒙古諸部落の起源三三八頁）は至言といつてよく、これが北喀爾喀として一の中心勢力をなして明に迫り、やがて淸軍と關係を有つに至つた所以が明らかになつて來るのである。

六、宰賽の活躍

以上述ぶる如く、後に清軍の爲に囚へられた喀爾喀の强酋宰賽は、所謂泰寧の速把亥の末弟なる兀班の第二子伯言兒を父としたものであつて、決して速把亥の長子卜言兒がその父ではなかつたのである。而してこの伯言兒が强盛であつた事は、明人の記錄によつて明らかであるが、萬曆二十二年十月伯言兒が廣寧方面に寇して高平に於て傷いて死んだのは、一時的にせよ喀爾喀に大なる打擊を與へたことは亦疑ない。明史卷二二三九董一元傳に「至是被戮。諸部爲喪氣。其部下遂納欵」。と、伯言兒の敗死に關して言ひ、又同時に傷いてやがて死んだ把都兒(卽ち卜言把都兒)に關しても、「未幾死。其衆散亂。諸部悉遠遁」と記して居り、同じく明史卷二二八李化龍傳、萬曆二十三年の條には、「去年把兎○把都兒伯言○伯言兒戰死。炒花・花大一敗塗地。今伯言子宰賽受爵入市。廣寧・遼・瀋・開・鐵間警報漸希。」と言つて居ることによつて、其狀況を知り得る。故に確かに喀爾喀は全般的にこの年の

敗北を以て大打擊を被つたのであるが、是を以て再び起つ能はざるに至つたとは言へない。それは其後に於ける明人の記錄に照して疑ない所であつて、速把亥・把都兒の系統は前述の炒花(紗花の)手により、伯言兒の系統は其子宰賽の手によつて總べられ、着々とその勢力を回復挽回して來たのである。現に明實錄萬曆三十七年八月の條李化龍の言に、「自遼河以東。則宰賽・煖兎競長爭雄」とあるのは、前回の事件より十五年を經た後のことであるが、遼河の邊外に於て伯言兒の子宰賽が舊勢力を復興し得た事を示して居ると思はれる。此に見える煖兎が察哈爾の一族で、小王子に雁行して勢力あつたものである事は、和田博士の夙に指摘される所(內蒙古諸部落の起源三四六—三五一頁)であり、煖兎・宰賽の二者は常に互に雄を爭ひつつ寇をなした事は、熊廷弼も「煖兎・宰賽等直開原西」と言つて居る(籌遼碩畧卷之一熊廷弼題ノ一)ことによつて伺はれる。かくの如く宰賽が其父の敗死の後に於て再び勢力を得て來た事に關しては、固よりそれ自體の勢力による事は言ふ迄もないが、又一面北關葉赫との關係が預つて居る事を、看過し

てはならない。清太祖實錄をみると、萬曆丁酉（二十五年）の條に、北關の酋納林布祿の行動について次の如き記載をなして居る。即ち

時納林布祿背盟將所獲盡奪之。仍擒穆哈連送與蒙古。又將錦台什之女與蒙古喀爾喀部齋賽貝勒結親。（滿洲實錄）

とあるのがそれであつて、この齋賽が宰賽であることは言ふ迄もない。而して錦台什は同じく葉赫の部酋の一人であり、同年その女を太祖の次子代善の妻となすべく約したのを止めて宰賽に與へたのである。尙この事は山中聞見錄卷一には、萬曆二十九年の條に「北關那林索羅・白羊骨乃約婚西人宰賽以自託」とあるが、明人も之を知つて居たものと思はれる。この事たるや北關葉赫の違約として淸太祖の怒る所であつたが、當時の葉赫としては未だ太祖をそれ程强盛であるとは考へず、依然蒙古喀爾喀をより强力のものと考へたものであり、たとへそれより三年前に伯言兒が敗死したにせよ、喀爾喀の勢力は間もなく相當に回復して來た事を語るものといつてよからう。又一方喀爾喀としても滿洲の强雄たる北關葉赫と結ぶことは、敗戰の後である結果として、明に對し又淸に對してもこの上なき好都合の事であつたから、喜んで葉赫の提議に應じてこの暴擧をなすに至つたものと想像される。從つて其後北關葉赫と南關哈達とが不和となり、遂に萬曆二十七年に哈達が太祖の爲に滅された後に於ても尙葉赫の納林布祿が蒙古兵を率ゐて哈達を侵した事が太祖實錄に見えて居る（萬曆二十九年の條）のも、或はこの喀爾喀宰賽の部兵であるとみてよく、此に至つて宰賽も漸く傷痍より回復し來たのでないかと思はれる。かくの如くなつて來ると、同じ蒙古族の喀爾喀部內に於ても、宰賽に反感を懷いて却つて淸朝に附かんとするものが出て來るやうになるのであつて、萬曆三十三年喀爾喀巴岳忠部達爾漢貝勒の子恩格德爾台吉が通貢し、更に翌年末には恩格德爾台吉は喀爾喀部五貝勒の使を引具して來り、太祖に崑都侖汗の尊號を上つたといふのも、正しく宰賽の復興のため却つて身の不安を感じて淸朝に附したものある事を語るものと考へる。巴岳忠部は喀爾喀五部の一部であり、前述の炒花の五大營の條にも見えるものであるが、

比較的勢力弱かつた爲に早く清朝に附して以て宰賽等の抑壓より免れんとしたのであらうか。以上の如き次第であつてみれば、前述のやうに萬曆二十二年に喀爾喀部、殊に宰賽や把都兒の系統のものは大打擊をうけたが、後徐々に勢力を回復し＝それには北關葉赫と結親した事も預つて力あり＝て來た事が明らかになるのであつて、從つて萬曆三十七八年の頃に至つて、宰賽が煖兎と雄を爭ひつつ勢力を張つたことも容易に首肯出來るのである。

山中聞見錄卷一、萬曆三十七年の條に、「太祖……又勾西人宰賽・煖兎等窺開原遼陽。邊吏日夜告急。御史熊廷弼按部遼陽。屢上章策。建州必反。請…急撫北關收宰煖以攜其交。」と記して居るのは、前記の籌遼碩畫の記事に適ふと同時に、明臣がこの復興の勢力を味方にし且つ太祖より引離して、以て滿洲經略を進めんとしたに外ならないのである。之に對して太祖としては、又彼等の勢力を利用する事が明に對して經略をなす上に得策であつたから、これ亦種々の策を弄したものであり、己との約束を反古にした北關は宿敵であるから論外として、その女を得た宰賽には故意にその事に觸れずして、誘引せんとしたものと思ふ。かの籌遼碩畫卷一の熊廷弼の題（萬曆三十七年頃と思はれる）＝審進止伐虜謀疏に、

去年誘殺宰酋之謀。奴酋遣人密報。宰酋得脫。而又因此以間北關。謂實知其謀不以告也。宰酋遂因此感奴酋。恨北關。近奪北關馬百數十匹。又欲會合奴酋。同搶北關。以雪不告之恨。……

とあるのは、よく宰賽と太祖との關係を示すものであつて、太祖の周到狡智なやり方を知ると共に、敢てかくの如くならしめた宰賽の勢力の復興を知らねばならないのである。かくして宰賽は巧みに太祖に籠絡されて、明を共通の敵として相當るに至つたのであるから、其後二者が共同し呼應して明邊に寇した事は、蓋し當然の結果に外ならない。

然らば其後宰賽は如何なる活躍をなしたであらうか、次に考察してみよう。全邊略記卷十遼東略によれば、萬曆三十七年六月の條、熊廷弼の言を記した中に「春夏以來。三面合虜。拱兎報仇于錦義。宰賽挾賞于開原。牧夷

糾犯于遼瀋。……」とあり、その頃の宰賽の活動振りを知る事が出來る。邊關に於ける挾賞は蒙古族の常事で、明も亦清朝牽制のために蒙古族に厚く賞賚して居たから、宰賽のかかる擧動は當然のことといつてよい。從つて若し明側が之に應ぜずして强硬な態度に出る時は、彼等は單獨に或は清朝と通じ、又北關と通じて更に邊境を犯す事になるのであつて、山中聞見錄卷一、萬曆四十一年癸丑三月の條に、太祖益墾南關曠土。糾西人宰賽・煖兎・卜兒亥・瓜兒兎二十四營。馳清河。遼東告急。檄徵薊兵五千赴援。幷禁羅及貂參珠寶。」とあるのは、卽ち宰賽等が太祖奴兒哈赤と合同して益々邊患をはげしくせしめた事を語るに外ならぬ。又北關と清朝とは決して親善ではなかつたが、明朝に對する限りに於ては必らずしも合體せぬでなく、殊に蒙古族が仲に入る時は、蒙古を介して三者の聯合も成つた如く、從つて蒙古諸部は北關とも常に聯絡して居た事は、前揭の諸記錄に記される所である。清太祖の卽位して天命と建元するや、いよ〳〵其勢力は牢固たるものあり、此に蒙古族も壓迫される形勢になつて來たので、それに刺戟されて其の活躍も一層さかんになつた如く、全邊略記遼東略、萬曆四十五年正月の條には、「宰賽・卜兒亥糾犯開原永寧。」とあり、山中聞見錄卷二の四十六年四月の條には、太祖の撫順攻陷に引續いた記事として、「宰煖各營方集遼河西岸。虎墩傳調哱喝。炒花亦屯鎭靖邊門。東西騷動。」とあり、活潑な動きを見せて居る。以て宰賽その他の諸酋の活躍の狀況を知り得るであらう。この中にて宰賽等が太祖と通ずる所あつた事は、前述の所によつても推測される所であり、同じく山中聞見錄には同年五月の條に、「太祖結婚朝鮮。……與宰煖合衆近十萬。北關惴々不免。……」、同七月の條には「建兵勾宰賽入鴉鶻關犯清河」と記して、此では北關が太祖と宰賽等との合力の爲に危險に陷つた事、及び宰賽が太祖の誘引に應じて大なる貢獻をなした事を述べて居る。右に見えるト兒亥は巴岳忠部の酋で、先に清朝に來貢した恩格德爾台吉の父なる事は、既に和田博士も述べられた（前揭書三五六―三五八）が、瓜兒兎は遼夷略によれば宰賽の第二子であり、煖兎は前述の如く察哈爾の一族、虎墩

は察哈爾の宗主陵丹汗に外ならない。乃ち玆に至つて太祖の蒙古經略が進展すると共に、宰賽は益々之と結托して明邊を侵すやうになり、明としては腹背に危急を感じたのであつたが、宰賽の强盛に對して蒙古部内にても次第に反感を抱くものあり、明は之に乘じて誘引贈賄を以て牽制するに至り、それが爲に宰賽も先の誼を忘れて太祖に對して反抗の風を示すに至つたやうである。それがやがて萬曆四十七年(天命四年)七月の事件へと及んで行くのである。

七、宰賽の晩年

さて萬曆四十七年七月二十五日、清の太祖は鐵嶺を攻めて此地を占領したが、其の混雜に乘じて宰賽も兵を出して掠奪を始めたので、太祖は討滅の機來れりとして、遂に兵を向けて之を伐ち、宰賽等を俘へるに至つた。この事は清太祖實錄・滿文老檔等に詳しく記され、又明側の記錄にも見えて居る事は、贅言に及ぶまい。太祖實錄や滿文老檔によれば、この時の宰賽の軍には、扎嚕特部の巴克貝勒(Bak)・巴牙爾兎代青(Bayartu-daiching)・色本台吉(Sebun)や、科爾沁部の明安貝勒(Minggan)の子桑阿兒寨(Sanggarjai)等も參加して居たのであるから、宰賽の强盛に誘引されて一種の大同團結が成されて居たことが知られる。而して結局宰賽を始め、色特希爾(Sethi)克實克圖(Kesiktu)の二子、及び扎嚕特部の巴克・色本、科爾沁の桑阿兒寨等の主要人物が、凡て擒へられたのであるから、太祖が報を得て驚喜した事は察するに餘りある。これに反して北强として羽振りのよかつた宰賽にとつては、全く不慮の敗北であり破滅に外ならず、ここに哀れにも宰賽は再起するを得ない狀態に陷つたのである。されば其年十月末に粉花は書を致して宰賽の罪を謝して盟を乞ふたのであつて、往年の勢威は地に落ちて主客地位を顚倒するに至つた。太祖はその請を許して盟ふと共に、宰賽を以て蒙古部族への見せしめにする事とし、間もなく二子をして交代に歸國せしめ、更に天命六年(明天啓元年)八月に至つて漸く宰賽を還らしめたが、强雄宰賽も最早威望衰へて清朝に抵抗するの氣力な

きに至つた。但し三朝遼事實錄同年十月の條、王在晋の奏に「虎酋恐傷宰賽之心。既不能爲我之助。……」とあるのは、或は虎酋卽ち陵丹汗が尙宰賽の勢に制せられた事を語るものと考へられぬこともないが、之は單に一時的の事であり、其後宰賽は全く勢を失つてしまつたのであつて、此に至つてさしも强盛であつた喀爾喀の勢力は根底から掃はれたといつてよいのである。尙淸朝側では、宰賽の子として、色特希爾・克實克圖を記し、遼夷略には靑台州・瓜兒兎・海來兎の三人をあげて居り、一致しないが、或は五人の子の存在を語るもので、明人は俘へられた二子を脫落したものかも知れないと考へられる。然しとにかくこの鐵嶺の一件によつて、蒙古族が非常な衝擊をうけたことは疑ない所であり、その事は明人にも十分分つたと見えて、三朝遼事實錄卷一萬曆四十七年八月の條に、「奴酋連破開鐵。兵益强。生擒宰賽。鈐制煖兎・粉花數十營不敢動。取北關如拉朽。視遼瀋直几上肉耳」と記し、又山中聞見錄卷二、同年九月の條に、「建人旣禽宰賽。威制煖兎・炒花數十營・懾服不敢動。取北關如拉朽。謀遼瀋益急。」といふのは、俱に相似た記事であるが、如何に明人の眼に悲しむべき異變として映つたことが、よく知られると思ふ。

以上述べる所によつて喀爾喀の强酋宰賽の世系と、その活躍の一面とは十分明らかになつたと思ふが、要するに彼は、速把亥の亡き後に於て、速把亥の親弟たる粉花と並んで勢力あつた伯言兒の後をうけ、同じく粉花と共に北邊に活躍したのである。而して父なる伯言兒が粉花の弟なる兀班の二子である以上、年齡の上に於ては粉花と相當の隔りがあつたであらうが、よく父の勢力を繼いで北方福餘衞の故地方面に威を振ひ、常に開原慶雲堡方面に出沒して明將を惱まし、或は又北關葉赫と結び、或は淸朝と結んで邊患をなした事が知られ、最後に蒙古族の頹勢を一擧に挽回すべく鐵嶺を襲つて淸太祖に俘へられ、雄圖挫折してしまつたこと、それは延いて蒙古族の衰退に拍車をかけたものである事が明らかになると考へるのである。（昭和一七・一〇・七）